

優秀賞

わたし

茨城県 茨城県立下館第一高等学校一年 栗原 心海

皆さんの考える幸せのかたちとはどのようなものですか。欲しい物が何でも買えることですか。たくさんの人から愛されることですか。誰よりも高い位につくことですか。幸せとは何でしょうか。

私には、父、母、十個上の姉、七個上の兄がいます。幼い頃の私の休日は、歳の離れた姉や兄の習い事や大会に行くばかりで、友達から出かけた話を聞くと、少し羨ましく思ったこともありましたが、休けい中に兄や姉が遊んでくれたり、母が近くの公園を調べて連れていってくれたり、長期休みには、父が旅行へ連れていってくれたりしたので、不満を感じたことはありませんでした。年末の夜には、家族みんなでボードゲームをやるのが恒例になっていました。ルールはよくわからなかったけど、ただ楽しかった思い出が、強く残っています。私は、自分の家族が何よりも大切で、大好きでした。

そんな、私の何よりの宝物は、小学校四年生の冬に、壊れてしまいました。父と母のけんかがどんどん大きくなっていき、父と母と姉と兄の四人で話し合うことが増

自分を責め、「はっきりしないと」と思い、母に嫌われようと必死にきつい言葉をあびせ、連絡先を消しました。毎日毎日、大好き、愛していると伝えてくれていたメッセージも、すべて消し、心に大きな穴が空いたような感覚になりました。

そんな心の穴を埋めてくれたのが、父でした。一度だけ、父はお酒を飲んだときに母の話を聞きましたが、次の日の朝には父は何も覚えていないようだったので、私も覚えていないことにしました。でも、それ以来父は、私と二人のときにお酒を飲まなくなったので実は覚えていたのかもしれませんが。他にも父は、私のための禁止をたくさんしていました。ですが、それだけではなく、お仕事をしながら家事もやって、休日はいつもお出かけに連れていってくれました。髪も結んでくれました。ぐちゃぐちゃだったけれど、私はほこらしく思っていました。忙しいけど、毎日楽しいという父が、私は大好きで尊敬していました。私は、幸せでした。

中学生になり、母のこと以来疎遠になっていた姉や兄と連絡をとるようになり、兄は私たちの家から仕事へ行くため帰ってきて、三人で暮らすようになりました。姉は、愛知県でひとり暮らしを始めましたが、お正月には帰ってきて、月に一度は連絡をとるようになりました。

中学三年生の秋、いつもどおり姉と電話をしていたら、姉から、母に会いたいかと聞かれました。私は少し戸惑

えました。私は、まだ幼いからといって、隣の部屋に一人でいました。たまに様子を見にきてくれる高校生の兄は、笑顔で、

「大丈夫だから、大丈夫大丈夫。」

と頭をなでてくれましたが、兄の目はいつも潤んでいて、いまにも涙がこぼれ落ちそうでした。そんな生活が一ヶ月近く続いて、私に伝えられたのが、「お父さんとお母さんはお別れすることになった」でした。みんなの決心した目を見たら、何も言えず、ただ涙を流しました。

私はまだ小学生だったので、この家から離れてしまうのはどうしても嫌で、私は父と、高校三年生の兄は母と、専門学校を出て、成人した姉は働き、一人暮らしを始めました。最初の頃は、姉のアパートに泊まったり、母と兄のアパートへ泊まってどこかへ出かけたり、かたちは違えど、家族みんなと過ごせて幸せでした。でも、働いて大変そうにしている母や、母の話をしたとき、一瞬悲しそうな顔をする父を見たとき、私は胸が苦しくなりました。自分の半端な言動がみんなを苦しめているんだと



ったけれど、素直に、会いたいと答えました。姉はとても嬉しそうに話をすすめて、母の電話番号を教えてくださいました。電話番号は、五年前と同じでした。電話をかける時、懐かしい声で、

「もしもし、みーちゃん？」

と呼ばれ、無意識に大量の涙が頬をつたって、落ちていきました。そこから、何度か会い、今までの話をたくさんしました。五年もの溝はもう、跡形もなく消えました。まだ、言えていないけれど、高校を卒業したら、父にこのことを話して、理解してもらいたいです。また、家族と関わって、私は、幸せです。

皆さんの考える幸せのかたちとは、どのようなものですか。私は、無条件に愛してくれて、自分も愛を与えられる人がいることだと思います。私は、父と二人のときに感じた幸せを絶対に否定したくありません。それでも私の幸せは、家族全員がいてこそそのものだと思います。私の家も、好きなものも、経験も、顔も名前も、家族の絆の証明であり、大切な宝物です。私は、私が大好きです。私が私である限り、心の中で家族が繋がっています。私は、本当に幸せです。